

Title	名詞の性をめぐって
Author(s)	山口, 巖
Citation	ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 (1998): 158-170
Issue Date	1998-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/65828
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

名詞の性をめぐって¹

§1 我々が文法性 *genus* について考えるとき、屢々耳にする一つの論理がある。例えば同じく「太陽」を意味する語は、フランス語では *le soleil* (男性)、ドイツ語では *die Sonne* (女性)、ロシア語では *солнце* (中性) というように、言語毎にその *genus* の所属を異にする。従って少くとも自然性 *sexus* を有するもの以外は、*genus* による名詞の帰属は単なる伝統の然らしむるところに過ぎないのであり、このような分類に何等かの有意的な契機を附与する事は否定さるべきであるとする²。

§2 このような論理は一見自明のことも思われるが、必ずしも首肯できないものを含んでいる。*genus* といえども一の言語現象であり、客観的に実在する言語外的な *sexus* とは異って言語体系の内部において考察されねばならない。これは言語を一の構造として捉える立場からは当然のことである。この故に相異なる言語において、何等かの言語事実を比較せんと欲するならば、それは個々の事実の比較ではなくして、全体としての構造の比較でなくてはならない。上に引用した行論にはこの点の考慮が欠けている。

ところで一般に比較が可能である為には、そこに何等かの共通性が予定されなければならぬ。比較言語学においてはこれは起源の共通性であった。今の場合には言語が人間の使用するものであるという、いわば人間性という共通性に基いている。フンボルトの謂う *eine Sprache* である。このような比較にあっては当然ながら言語の系譜はさほど大きな問題ではない。起源を同じくする親近諸言語といえども、構造的には同一であり得ないからである。かくして我々は異系言語間の比較の、理論的基礎を獲得する。

§3 次に伝承の問題がある。言語の所与の段階における構造がそれ以前の段階に依存していることは疑うべくもない事実である。しかしこの構造が以前の段階の自然発生的な、無目的的な変化の結果であるということとはできない。通常アナロジーという名によって包括せられる、音韻変化その他の「規則的」変化の法則に背馳する数多くの例がこの事を証明している。即ち所与の段階における言語の構造は、これに先行する段階の意図的な作り変えの結果と考えられるのである。所与の言語の構造が、無数の発展段階を通ずるこのような活動によってもたらされたものであるとするならば、発展の不均等の結果生ずる幾多の夾雑物を含みながらも、この構造に所属する言語現象は、全体として構造内部の法則性

¹ 『ロシア語ロシア文学研究』第2号 昭和45(1970)年10月 1-16頁。

² cf. I. Fodor, *The origin of grammatical gender*, *Lingua*, 1959, vol.VIII(1), p. 4.

に照応しているとみななければなるまい。単なるカオスとは考えられないのである。

性の原理

§4 以上述べた事を何よりも雄弁に物語っているのは、外ならぬロシア語の歴史である。印欧語においては周知のように *genus* と語幹の構成様式とは全く異ったものであった。(cf. *pater : mater, exercitus : manus, dies : species* etc.) が、現代ロシア語においては両者は大部分融合している。*genus* は概ね語尾に依って判定する事を得るのである。

このような状態は単なる機械的な音韻変化によってもたらされたものではない。ここにはホラーレクの謂う「性の原理」*rodový princip* が強く働いていることが知られるのである³。

例えば男性単数主格語尾 **-os* はロシア語では *-u(ь)* となり、中性 **-om* は *-o* となった。e.g. **wlk^w-os* 「狼」 > sl. *vliku* > r. *volk* : **yug-om* 「くびき」 > sl. **igo* > r. *igo*。しかし他方では接尾辞 **-e/os-* による構成にかかる中性名詞 **klew-os*, **nebh-os* などは夫々 *slovo, nebo* となり、**slovu*, **nebu* とはなっていない。

親族名をあらわす接尾辞 **-er-* を有する名詞 **mātē(r)*, *dhughatē(r)* はスラヴ語では夫々 *mati*, **dūšti* であるが、ロシア語では *mat'*, *doč'* として第三変化に移行した。これに対して **swesōr* は **swesr-ā* のように二次的に *-ā* 語幹に移行し、主として女性名詞が属する第二変化の形式をとり、**bhrātē(r)* は *bratru*, *bratu* のように第一変化へ移行した。

また **daiwhē(r)* 「夫の兄弟」、**yenhtē(r)/*ynhtē(r)* 「夫の姉妹」も夫々 *dēveri* > r. *dever'*, *jetrovj* > r. *jatrov'* となるが、前者は第一変化に、後者は第三変化にとその帰属を分った。このような現象が生じたのも、偏にこれらの語の有する *genus* にその原因があったと考えるべきであろう。

このようにして第三変化に女性の *genus* を有する語が次々に移行し、結果としてこの変化形式が漸次女性の *genus* に特有のものとなって来つつあったところから、従来この変化形式に属していた男性名詞はやがてその去就を迫られるに至った。ロシア語は単数主格の形が音韻的に等しい第一変化(軟変化)に移行せしめることによって、これを解決した。即ち本来 I 語幹に属すべき *gosti*, *tisti*, *medvědi*, *golōbj*, *čruxj*, *zvěri*, *oqli* 等の男性名詞は、*poṭj* を唯一の例外として、総て第一変化の形式をとるに至ったのである。

あるいはまた接尾辞 **-men* を有する男性名詞、例えば **ka-mōn* > sl. *kamy*, 生格 **ka-men-es* > sl. *kamene* は斜格の影響による所謂 *back-formation* に依って *kamenj* となり、第一変化に移行した。

solvo, slovese の類も第一変化に移行し、*slovo, slova* の如く変化するに至った。

以上述べた所謂第五変化形式の崩壊に特徴的にみとめられる、*genus* に依る語の分化は、

³K. Horálek, *Úvod do studia slovanských jazyků*, Praha 1955.

古代ロシア語期に入ってから完成したものと考えられる⁴が、何れにもせよ今日観察される genus の範疇が、以前の段階の機械的な継承に過ぎないとする考えの不可なるは明らかである。この範疇には、それがよって立つところの何等かの有意的な基盤が存在するようにも思われて来るのである。

印欧語の性

§5 印欧語の最も古い段階に於いて genus がどのようなものであったかは、未だ明らかにされていない。しかしかなり古い時期に genus が活動体 *genre animé* と不活動体 *genre inanimé* の二つであったろうことはほぼ疑いないと思われる。一つにはこれは多くの徴候から未だ屈折が十分に発達していない時期に印欧祖語から分化したと推定されるヒッタイト語に、この二つの genus しか知られていない事にもよるが⁵、印欧語の形態の面からも、推定することが可能である。即ち古い時代には印欧語は男性と女性を区別すべき何等の形態的徴条をも保有してはいなかったとみられるのに対し、中性は語尾、語尾に先行する要素の母音度、或はアクセントの位置等によって爾余のもとと区別せられていたと考えられるのである。例えば *aliu-s* (m.f.) : *aliu-d(n)*, *omni-s* (m.f.) : *omn-e(n)*, *parçú-h* (m.f.) : *parç-u* etc.⁶。

勿論これは印欧語の極めて古い時期の状態の推定であって、歴史時代には、既にヒッタイトに於いても看取されるように、必ずしも不活動体をあらわす語が不活動体の genus に所属していた訳ではない。しかしながら以上のような推定が正しいとするならば、生成の初期にあつては、genus の区別は言主体に依る外界の認識と概ね合致していたと考えられる。我々はこのような、いわば理想的とも言える状態に極めて類似せる現象を、時空を遠く距てた現代ロシア語に見出すことができるのである。

§6 このような生物と無生物という明白な原理による対象の類別は更に第三の範疇が発生することによって複雑なものとなった。女性の genus である。多くの学者はこれが生物の genus の男性と女性への分裂に依って生じたと考えている⁷。ヴァイアンはこれに対し、女性の genus の発生を不活動体の genus に求める⁸。

これは恐らく **-ā* にかかる構成様式が、中性複数の代りに使用された集合名詞と起源的に同じであること、**-ā* による名詞が活動体の genus の指標である主格の語尾 **-s* を有しないこと、などの事情を勘案した結果と推察されるが、後代の発達にかかる **e/o* 語幹と

⁴cf. П. Я. Черных, *Историческая грамматика русского языка*, 1954, стр. 176.

⁵cf. В. В. Иванов, *Хеттский язык*, М. 1963, стр. 113.

⁶A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, pp. 189-190.

⁷例えば A. Meillet, *Le genre féminin dans les langues indo-européennes*, *Linguistique historique et linguistique générale*, II, 1952.

⁸A. Vaillant, *Sur l'évolution du genre des cas et des parties du discours*, *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, p. 37, 1936.

*a 語幹の対立を別にすれば、中性が語幹あるいは語尾に於いて男性及び女性と対立していることから、ヴァイアンの所説は俄かには受入れ難いものを含んでいるように思われる。

§7 スラヴ諸語における所謂活動体と不活動体の区別は比較的後代の発達にかかるものであり、その成立過程は大部分文献によって追跡することが可能である。これに従えば活動体の指標である所謂生・対格は、先ず人をあらかず固有名詞のうち男性単数の名詞に現われ、やがて男性名詞複数、女性名詞複数、次いで人以外の動物名にと一般化する⁹。

このようにしてみれば、初原的な活動体と不活動体の区別の一方の極である活動体が男性と女性の *genus* に分裂し、その一方の極である男性の *genus* がスラヴ語では更に分裂して活動体と不活動体が生じたと考えられる。

このように分裂するのが常に一方の極であって他方ではないとすれば、この極は分裂する何等かの契機を「遺伝的」に継承していると考えてもよいかも知れない。このような経過の示唆するところのものは、現代ロシア語における活動体と不活動体の区別といえども決して *genus* と本質的に異った現象ではあり得ないということであろう。メイエ、ヴァイアン等がこれを目して *sousgenre* としているのは、この意味において当を得たものといえよう。

活動体と不活動体

§8 スラヴ語における活動体と不活動体の形態的特徴は、主として対格にあり、前者がこれを生格と等しくする (GA 形) のに対し、後者は主格と形を同じくしている (NA 形)。

この範疇の生成した相対的年代について概観すれば、その萌芽は文献以前に遡る時期に既に存在していたと考えられる。例えば *оузъръѣ ісоуца ідашта* (*Остромир. ев.*) のように、古代スラヴ語で書かれた比較的初期の文献にも既にこの種の GA 形の存在が認められるのである。

しかしこの事実は、この範疇が文献以前の時期に既に成立していた事を物語るものではない。この時期に GA 形の存在が既に活動体と不活動体という範疇を立て得るほどに十分に体系的であったかどうかは、また別箇の問題とせねばならないであろう。

§9 初原的にはこの範疇は e/o 語幹男性名詞のうち、人を表わすもの (指人名詞) に発生し、後に活動体名詞に一般化するのであるが、この場合にも単数に限られていた。現代ロシア語にみられるように、活動体の男性名詞の単数及び複数、女性名詞の複数にも行われるようになったのは、比較的後代のことに属する。

例えば古代ロシア語の初期の文献においては、指人名詞以外の男性活動体名詞は例外なく NA 形をもって現われており、この種の名詞に GA 形が一般化するのは漸く 1649 年

⁹ 拙稿「ノヴゴロド原初年代記シノダリ本における活動体と不活動体の区別について」『古代ロシア研究』第2号 昭和37年。

の Уложение に至ってであるといわれる¹⁰。

指人名詞男性複数に GA 形が使用された最古の例は、14 世紀モスクワ大公イヴァン・カリタの書簡に於いてであると言われる (e.g. пожаловаль есмь соколниковъ печерскихъ.)¹¹。この種の用例は僅かながらノヴゴロド原初年代記にも認められるが、他の活動体名詞に関しては、上述の Уложение にも未だ散発的にしか認められない。これが一般化するのには 17 世紀以降のことである。

女性名詞複数の場合には、男性名詞複数より更に遅れ、16 世紀に至って始めて GA 形が見出される (e.g. и рабынь научити. — Домострой)。しかしこれは未だ散発的であり、一般化するには猶一世紀を経過せねばならなかった。GA 形の活動体名詞一般に波及するのも、17 世紀より後のことである (e.g. птицъ прикормить. Уложение Алексея Михайловича)。

§10 前節に述べたことから、活動体と不活動体の区別は、女性よりも男性に、複数よりも単数に、一般活動体名詞よりも指人名詞にそれぞれあられ易かったと考えられる。ポテブニャは名著 *Из записок по русской грамматике* に於いて、「多くの事情は次の事を確信せしめる。即ち男性は女性よりもこれらの範疇の峻別により好都合であり、単数は複数よりもより好都合であるということである」と述べている。卓見というべきであろう。

§11 従来行われて来た説に従って、この範疇成立が、主格と対格を形態的に区別せんとする働きに起因するとするならば、これが何故指人名詞に発生したかを説明することは容易であろう。これらの名詞は主語として立つ場合が比較的多いからである。

しかしこの説は何故この範疇が女性より男性に、複数より単数にあられ易かったかを説明するものではない。女性名詞は複数において主対格が同形 (ы) であるにも拘らず、一応これを区別している男性名詞 (-и : -ы) より GA 形の一般化が遅れたという事実は、この範疇が女性の genus と何等かの点で相容れ難いものを含んでいることを示唆するものといえよう。

またノヴゴロド原初年代記の調査から、特にこの範疇が指人名詞中の固有名詞に早くからあらわれた事が知られる。これもまた上述の定説から説明することは困難である。

§12 ノヴゴロド原初年代記シノダリ本に於ける NA 形と GA 形の使用を分析した結果、両者の相違は、その指示する対象の個別性の程度に依存していると結論してもよいように思われる¹²。

NA 形が対象の聚合性を示すのに対し、GA 形はその個別性を強調する。GA 形はより

¹⁰ П. Я. Черных, *Историческая грамматика русского языка*, М. 1954, стр. 166.

¹¹ П. С. Кузнецов, *Историческая грамматика русского языка*, М. 1953, стр. 121.

¹² cf. 拙稿「ノヴゴロド原初年代記シノダリ本における活動体と不活動体の区別について」。

明確であり、個性的であり、具体的である。NA 形はこれに対してより没個性的、より抽象的であるということができよう。

GA 形が先ず指人固有名詞に一般化したのもこの故であり、単数形に現われ易いのもこの為であった。指人名詞以外の一般活動体名詞に GA 形が一般化する事が遅かったのも、また当然と考えられる。個別性の低い一般活動体名詞にこの範疇が滲透する為には、指人名詞に於ける GA 形の一般化と、これに伴う個別性の弱화가前提とならなければならないからである。

シノダリ本において、指人名詞の GA 形が、教会、宗教関係の人物をあらわす語、神、聖人等宗教的内容を有するもの、社会的身分の高い人物をあらわす語等、一般に何等かの点で他と明確に区別さるべき個性を有する語にあらわれることは、このような GA 形の有する個別性の強調という本来の職能が、未だ十分に鮮明であった事を示すが、これらの例はまた GA 形のこのような職能を支えるものが対象に対する価値の判断であったことを示している。

гридь「下級親兵」、полонь「捕虜」等の集合名詞、шуринь「妻の兄弟」等の親族関係において下位にある人物を示すもの、社会的に完全な権利を有しない人物をあらわす語 (e.g. рабъ)、異民族をあらわす複数名詞、その他一般に職業的身分的集団を構成する複数名詞が、主として NA 形をとるのも、また当然のことと考えられる。

現代ロシア語では *в* + 複数対格の構文において NA 形が未だ保存せられているが、この場合身分、職業をあらわす場合に限られていることは、上述の結果とよく照応する (e.g. быть произведенным в лейтенанты, принять ее в жены etc.)。

また同じく不活動体に属すべき мертвец, покойник (死人、故人) 等が GA 形をとるのに対し、труп (屍体) が NA 形をとるのも、それなりの価値判断の然らしむるところである。

genus と価値判断

§13 上述したように、活動体と不活動体の区別が、対象の有する価値の判断にあるとするならば、この範疇が、男性の genus に最も早くあらわれ、次いで女性の genus に一般化することと、価値の判断とが、密接に関連していると考えねばなるまい。

ところで genus については古来多くの学者が夫々の立場から論じて来たが、これには ① *sexus* の反映と考えるもの、② 言語の内的法則にその鍵を求めようとするもの、③ 両者の折衷、の三つの傾向が存在するといわれる¹³。① の立場をとる場合は、男性、女性、及びその何れにも属しないものとしての中性、という論理的な区別が、言語の発達に伴って混乱し、現在の如き非論理的なものになったとするもので、Adelung, Herder, Bopp 等の主唱したところである。

¹³I. Fodor, *op. cit.*

しかし名詞を genus に分類する仕方は、必ずしも印欧語におけるような三分法に限られてはいない。例えばスワヒリ語では名詞はすべて 7 個のクラスの何れかに所属せしめられる。してみれば genus は必ずしも sexus の反映であるということにはならないであろう。そうすれば、結局は ② の立場に立たざるを得ないことになる。

ヴントはその著 *Völkerpsychologie* において、各々の genus に属する名詞の意義を分類観察し、この分類の原理を「価値の区別」Wertunterscheidung であると主張した。私は §7 において活動体不活動体の区別と genus の区別が、原理的に余り異っていないであろうことを示唆した。genus の区別をもこのような価値の区別に基くものとするならば、これと活動体、不活動体の範疇との密接な関係は当然のことと考えられて来る。この場合「範疇」としては、男性が最も個性が高く、次いで女性、最後に中性という系列を形成するであろう。

語尾 -a の表現価値

§14 上述のような genus の系列と関連して、特にとり上げてみたいと思うものに語尾 -a がある。これは本来は印欧語の **-ā* に遡る語幹構成母音である。e.g. **g^wenā* > žena. cf. ME queen. これはまた印欧語において、形容詞の所謂 *motio* にみられるように e/o 語幹との相関において用いられ、女性の genus を表わすことが多かった。

この形は一方では中性名詞複数の **-ā* と密接に関連していたと考えられている。これが初原的に単数名詞として扱われていた事は、たとえば τὰ ζῶα τρέχει「けものが走る」、dhr̥ṣṇāve dhiyate dhanā「勇敢な人には富が増大する」のように、古くには単数形の動詞に依る一致が行われていた事から知ることができる。メイエはこれを -ov を語尾とする通常の中性名詞とは異った中性の集合名詞であるとしている。両者が単なる文法的 *paradigmatique* な相違ではなく、語の構成様式を異にする語彙論的な相違であることは、その形態上の特徴からして疑を容れないが、これはまた例えば lat. locus : loci, gr. σταθμός : σταθμοί に対して loca, σταθμά のような形が存在する事に徴しても明らかである。skr. cakrāḥ : cakrā「車」、gr. ἀστὴρ : ἀστρα「星」などもこれに属する。

§15 これと極めて類似せる現象はロシア語においても認められる。スラヴ語にあっては例えば БРАТ(Р)Ъ, КЪНАЗЪ 等に対して БРАТ(Р)ЬЯ, КЪНАЗЬЯ のように -ЬЯ の形を有する集合名詞が存在した。これは零階梯の КЪНАГЬИНЬ, РАБЬИНЬ < **-ün-ya* (cf. skr. patnī, gr. πότνια「女主人」) と共に女性接尾辞 **-yā* の構成にかかるものであり、ギリシア語の φράτηρ「兄弟」と φράτρᾶ「氏族」の対立と平行している。従ってこれは女性名詞の単数でなければならない。事実この形は古代スラヴ語のみならず、古代ロシア語においても比較的長い間女性変化を行い、また女性形の規定語を伴っていたのである。e.g. послани от Игоря, великого князя рускаго, и от всякоя княжыя (ПВЛ); Не ходили со всею князьею (ibid.); послалъ к братью своею в Русь (ibid.)

これらの集合名詞は、文献時代には既に動詞の複数形による呼応 agreement を行っていたが、初原的には単数形による呼応を行っていたと推定される。この推測を裏付けるものとして -ье による集合名詞がある。これは中性名詞、及び男性不活動体名詞から派生するものであるが、この構成によるものは動詞の呼応も単数によって行われていた。e.g. *Коли камень всплыветъ по водѣ ... тогда безумныи уму научится.* (Сл. Дан. зат.); *Да родится въ немъ камень дорогое* (Афан. Никит.); *Егда же ... листвие прозябнетъ въсте яко близъ есть жятва.* Мф. XXIV (Ост. ев.) etc. これらはやがて -ья の形をとり、それに伴って複数形の動詞による呼応を行うようになった。上述の *-yā の構成にかかる名詞の呼応も、恐らくはこのような過程を経て成立したものと考えられるのである¹⁴。

以上述べて来たところから、*-ā, *-yā の構成を有する女性名詞と集合名詞とは、何等かの点で近い関係を有していたと考えられて来る。由来一定の事物の集まりが一の集合として把握される為には、その成員の個別性の弱化が前提とならねばならない。従って女性名詞と集合名詞はこの個別性の相対的な低さにおいて共通し、共に男性名詞に対立すると考えることができる。序に言えば同じく男性の genus に属しながら、より個別性の高い対象を示す指人名詞が -ья による集合名詞を有し、初原的には女性の genus に移行したのに対し、不活動体男性名詞からの集合名詞は -ье によって構成せられ、中性の genus に属せしめられた。これは中性の genus が女性の genus よりも更に低い個別性を有する範疇であることを示すと共に、genus の区別と、活動体、不活動体の区別が同じ原理に立っていることを証するものと考えられる。

§16 さて指人名詞の場合は、概ね genus と sexus が一致して居り、-a は専ら女性名詞の語尾として使用されている。指小の接尾辞を有する場合にも、一般的には元の名詞の genus を保存し、それぞれの genus に特有の語尾をとるのが通則である。e.g. брат : брат-ец, сестра : сестр-иц-а, колокол : колокол-ьч-ик, рука : руч-к-а, солнце : солн-ышк-о etc.

これに対して若干の接尾辞は、人を示す異体名詞 heteronymie の場合、元の名詞の genus を保存しながらも、-a の語尾をとる。これは情緒的価値 valeur affective を多少とも強く有する接尾辞に多い。

1 -у(ю)шк-а (愛称)

дед : де-душк-а, дядя : дяд-ушк-а etc.

2 -ы(и)шк-а (軽侮、皮肉等を表わす)

колдун : колдун-йшка, плут : плут-иш-ка, человек : человек-ишк-а etc.

¹⁴cf. 拙稿「ロシア語における数のカテゴリーについて」『古代ロシア研究』第9号 昭和43(1968)年。

3 -о(е)нк-а (愛称)

дядя : дяд-еньк-а

4 -о(е)нк-а (軽侮をあらわす)

мал-ец : мал-ьч-онк-а, мужик : мужич-онк-а etc.

5 -ашк-а (軽い軽侮を表わす)

старик : старик-ашк-а etc.

§17 固有名詞に関しても、Петрушк-а (< Пётр), Ивашк-а (< Иван) のような形は愛称乃至卑称として使用されている。古代ロシア語の грамота についてみても、このような形をとる人名は何れも比較的身分の低い人物に限られている。これらの事を勘案すれば、「指小」の観念と「愛称」乃至は「卑称」の観念とは、極めて密接な関連を有していると考えられるが、これらの指小辞が何れも -а あるいは -о の語尾を伴うという事実を特に指摘せねばならない。現代ロシア語の Пётр : Петруш-а (愛称) : Петрушк-а (卑称)、Петр : Пет-я (愛称) : Петьк-а (卑称) のような系列にも同じことがみとめられる。

§18 語尾 -а (又は -о) は上述したところから考えれば、「指小」「愛称」「卑称」などの意義的な範疇と結びついていると考えてもよいように思われる。問題はこの語尾が genus と何等かの関係があるのか、或は全く偶然の所産に過ぎないのか、ということであろう。我々はこれを直接に検証する術を持合せないが、genus の区別を Individualitätsgrad に基礎をおくものとする考え方からすれば、ここには一定の関連があると考えないわけにはいかない。他の言語において「指小」の意義が genus に結びついている例が存在していることもこの考えを支持するもののように考えられる。

例えばドイツ語において指小の接尾辞 -chen によって構成された語は Mädchen の如く、sexus にかかわらず中性の genus をとる。あるいはまたスワヒリ語においては、すべての名詞を若干の genus に分属せしめているが、主として「もの」を示す名詞の属する ki 類に他の類に所属する名詞を移せば、指小の意義を帯びる事などが挙げられる。e.g. jiko 「さじ」 : kijiko 「小さじ」、mto 「河」 : kito 「小川」、ndege 「鳥」 : kidege 「小鳥」 etc.

思うに -а の語尾がこのような価値を有するに至ったのは、当初全体として個別性の低い事象を指示していた女性の genus 本来の価値感が、時と共にこの genus に屢々現われる語尾 -а の機能と感じられるようになったからではないかと考えられる。このような語尾 -а の潜在的な価値は、これが男性の genus を有する名詞と共に用いられた時、男性の genus が本来的に有する個別性の高さと相剋を生じ、これに特殊なニュアンスを付与する

結果となったと考えられるのではなからうか。

通性名詞

§19 このような語尾 -a(я) の価値と深く関わっていると考えられるものに、所謂通性名詞 *общий род*, *genus commune* がある。この種の名詞はすべて -a(я) の語尾を有しているという点で形態的に特徴があるが、意義的にも殆んどものが好ましくないか、あるいは軽侮の対象となる人物を示すという著るしい共通性を有している。これらは現代語の語感で、それ以上分析できないものと、接尾辞を有するものとに分たれる。前者の例は、*брюзга*「不平家」、*егоза*「せっかち」、*забияка*「けんか好き」、*зайка*「吃り」、*невёжа*「不作法者」、*обожора*「大喰い」、*рёва*「泣虫」、*сирота*「孤児」、*разиня*「間拔」、*соня*「寝坊」等々である。後者の場合には -a(я)к-а, -л-а, -яг-а, -у(ю)г-а, -ыг-а, -к-а, -у(ю)к-а, -с-а, -х-а, -ул-я, -ош-а, -уш-а, -ён-а, -он-я, -иц-а 等の形を有している。例えば *зевá-к-а*「ぼんやり暮す人」、*кусá-к-а*「人に喰ってかかる人」、*вышvá-л-а*「用心棒」、*работяг-а*「勤勉家」、*жадн-юг-а*「欲張り」、*тороп-ыг-а*「せっかち」、*плак-с-а*「泣虫」、*растер-ях-а*「途方に暮れた者」、*завир-ух-а*「ほら吹き」、*гул-ён-а*「怠け者」、*уби-иц-а*「人殺し」等。

このような通性がどのようにして発生したか、未だ充分には詳かにしない。或はヴァイアの指摘するように印欧語において *-ā が女性名詞に特有の構成様式となる前、即ち印欧語の性の分化以前に遡るものかもしれない¹⁵。

古代スラヴ語においては、*-ā の構成にかかる名詞で男性の *sexus* をも指すものとしては、*блнжнка*「親族」、*вннопннца*「のんだくれ」、*владдыка*「支配者」、*дрѣводѣла*「大工」、*пннннца*「のんだくれ」、*прѣдѣтеца*「先駆者」、*оубнннца*「人殺し」、*чародѣнца*「魔法使」、*ядьца*「大喰い」、*слоуга*「召使」等が知られている。しかしこれらは時として *къ старѣншннамъ жьрьуьскамъ* のように女性の一致 concord を示す事があっても、男性の *sexus* を有し、わずかに *жжнка*「親族」のみが女性の *sexus* を有する対象に用い得たに過ぎない。e.g. *жжнка твоѣ=η συγγενής σου* (Zogr.)¹⁶

古代ロシア語期においても *убоица*, *прѣдѣтеца*, *дрѣбодѣля* 等は常に男性の *sexus* を指すが、*винопиница*, *дѣца* などには *винопивьць*, *дѣць*, *ѣдѣць* 等の男性特有の形もあらわれた。男女両性をあらわす *ближника*, *ужика* にも *ближикъ*, *ужикъ* の形が一般化するなど形式と *sexus* との矛盾を解決しようとする動きが著るしい。特に *чародѣница* は *чародѣиць* の形の一般化に伴って女性の *sexus* のみを指すようになる。

§20 このようにしてこの類に属する名詞は夫々の *sexus* に従って形を変え、あるいは

¹⁵ A. Vaillant, *Grammaire comparée des langues slave*, Paris 1958, II-1, p. 300.

¹⁶ A. Leskien, *Handbuch der altbulgarischen Sprache*, 8. Aufgabe, Heidelberg 1962, pp. 78-79.

владыка, юноша のように形を変えずに男性の *sexus* を保存するが、убийца その他の名詞はやがて男性女性の両方を示すようになり、通性名詞の範疇の発生をみるに至ったと考えられる。その過程は明らかではないが、現代ロシア語の状態からすれば通性の成立について決定的な役割りを果たしたのが、意義的なモーメントであったことは、想像に難くない。好ましくない人物を示すもののみが通性に移行したと考えられるからである。

事実例えば зубри-ла「棒暗記しか能のない者」は зубрить から派生しているが、一方では страдать : страда-л-ьць「受難者、殉教者」のように -ьць を加えることに依って男性名詞を作る多くの例が存在していることに徴しても明らかのように、これが -л-а の形を保存すべき何等の理由も、外には存在しない筈である。これが -льць に依って置換されなかったのは、偏にその意義の為であった。語尾 -а(я) の存在の意味は、通性に属する名詞に共通する意義的なニュアンスを支える形態的な指標として役立つところにあったと考えられる。これはこの語尾の有する価値と無縁のものではないであろう。

中性

§21 指人名詞から派生する集合名詞が -ья によって構成せられるのに対し、不活動体を示す集合名詞は -ье によって構成せられた。即ち前者は女性の *genus* に、後者は中性の *genus* に属せしめられていたのである¹⁷。これに並行する現象は語構成法の場合にもみられる。-у(ю)шк-о, -ы(и)шк-о のように -о を語尾とする指小の接尾辞は、中性名詞と共に使用される。e.g. горе : гор-юшк-о, море : мор-юшк-о, молоко : молоч-ишк-о, письмо : письм-ишк-о, солнце : солн-ышк-о etc. しかし -ы(и)шк-о の場合、男性の *genus* を有する名詞であっても、不活動体の場合、この接尾辞をとることがある。e.g. дом : дом-ишк-о, забор : забор-ишк-о, тулуп : тулуп-ишк-о etc. これらは古くには中性の一致を行っていたといわれる¹⁸。現代ロシア語ではこれらは元の名詞と同じく男性の *genus* を有しているが、何れにせよこれらの不活動体名詞が中性名詞と同じ取扱を受けていることは興味深い。

§22 女性と中性の *genus* についてみれば、両者は相互に関連しつつ男性の *genus* に対立しているように思われる。抽象名詞は殆んどすべて女性又は中性の *genus* に属する。例えば -ота (беднота, быстрота) etc. -ета (нищета), -изна (белиза, новизна), -ина (величина, глубина), -щина (барщина, женщина), -ица (безводица, небылица), -ба (дружба, служба) etc. etc. の外 -ня, -отня, -ева, -ость, -есть, -ность, мость, -знь 等の女性名詞、あるいは -ие, -ние, -ство, -ество, -овство, -тельство, -шество, -енство, -тие, -ьё etc. の中性名詞がこ

¹⁷cf. § 15.

¹⁸П. Вазов, В. М. Никитевич, *Грамматическое категории в современном русском языке*, М. 1963, стр. 34.

れに属する。これに対して男性の *genus* に属するものは、-изм, -аж (cf. монтаж, саботаж) のような外来要素を除外すれば、僅かに -ёж (cf. грабёж, платёж), -от (cf. грохот, топот, хохот) を数えるのみであり、しかもこのうち -от は主として音声をあらわす語に使用されており純粹の抽象名詞とは若干異っている。

また古代ロシア語の文献にみられる人名においても Вятк-о: Вятк-а, Иванк-о: Иванк-а, Ивашк-о: Ивашк-а のように -a と -o とは極めて普通に交替していた。これらの人名は何れも指小の接尾辞を含み、身分の比較的低い人物を指していた。指小、愛称、卑称その他の感情的な判断を含む名詞の構成においても、-a 及び -o の語尾は普通に見出される。

このように女性及び中性の *genus* が男性の *genus* に対立する場合に対し、男性及び女性 *genus* が中性の *genus* に対立している場合もある。

例えば дед: дедушка, жена: жёнушка あるいは плут: плутишка, земля: землишка のように、男性及び女性の *genus* を有する名詞の指小辞は -a の語尾をとるのに対し、同じ接尾辞を有していても море: морюшко, молоко: молочишко のように中性の *genus* を有するものは -o の語尾をとる。-a と -o の語尾の両方をとらない場合にも、男性及び女性の *genus* を有するものが主として -a の語尾をとるのに対し、中性の *genus* に属するものは専ら -o/e の語尾をとる。e.g. волос: волосинка, роса: росинка, старик: старикашка, мальчик: мальчонка, корова: коровёнка, лапа: лапина vs. болото: болотце, дерево: деревцо, солнце: солнышко etc.

以上述べたことから、中性の *genus* は女性の *genus* と共に男性の *genus* より個別性が低く、また女性の *genus* より更に個別性が低いことが結論される。

結 語

§23 以上述べて来たことを総括すれば、*genus* の範疇は種々の夾雑物を含みながらも全体として一定の価値の体系を構成していることを感じないわけにはいかない。しかもこの価値は先に活動体不活動体の範疇において考察したものと、本質的には同じものであると考えられるのである。男性、女性、中性の *genus* はそれぞれ独自の個別性の程度 Individualitätsgrad を有して居り、男性、女性、中性の順にその程度が低くなっている。語尾 -a 及び -o は、女性及び中性の *genus* に属する名詞の最も著しい形態的指標として、夫々の *genus* 固有の Individualitätsgrad を担うようになったと考えられる。このようにしてこれらの語尾は独立し、対象の個別性の弱化を表示する機能を獲得するに至った。少なくともこのように考えることに依り、これらの語尾が指小辞、愛称、卑称等に使用されることもよく理解できる。通性名詞の成立もまたこのように考えれば、よく理解できるであろう。

また対象の個性が低下すれば、その集団は一の集合として認識されるに至る¹⁹。この集合の成員の個別性が更に低下すればそれはついに均質なものとなるに違いない。このような集合にあっては、実体はもはや個々の対象の「集合」ではなく、対象から抽出された一の観念でなければならない。かくして集合は抽象名詞の性質を帯びる。抽象名詞が多く女性又は中性の *genus* に属するのも、またこの故であると解されよう。

§24 成員の個性の低下と、その集団の「集合」化の関連は、現代ロシア語にもみとめられる。男性第一変化複数語尾 *-a* の発達がこれである。これは不活動体に用いられている場合には集合名詞的なニュアンスを以って個性の比較的低いものに使用される傾向をみせるに過ぎないが、活動体名詞の場合には主として職業的集団に用いられる。これは対象が一の社会的集団に転化した事による成員の価値の低下にその原因を求めるべきであろう。これは *учител-и, учител-я* のように両様の語尾を保存する場合その意義を個性の程度に応じて分化せしめている例の存在からも推測される。また *офице-ры/a* の場合、*офицера* の形が軽侮のニュアンスを帯びるというシチェルバの指摘もある²⁰。既に規則的語尾を有していた *докторы, профессоры* が、大勢に逆行して *доктора, профессора* となったのも、こう考えれば始めて合点がいく。この語尾は中性複数の語尾の借用と考えられるが、ここにも *genus* の有する価値のニュアンスが影を落していたということが出来るであろう。

§25 以上述べ来たところから、例えば *Приходит к ним женщина. И по всему видать шмыгало такое!* における *такое* という文法的一致の有する表現性もよく把握できるように思われる。この一致を単なる形態的な一致に過ぎないとするニキチェヴィチの説には賛意を表し難い²¹。*Зазвонили к ужину. Алексей Никитич пошел взглянуть, спит ли бесценное Гаврило. (Л. Леонов)* の如き一致も同様に理解される。

現代ロシア語において、例えば *агроном, брач* などの語は女性をあらわす時にも *Она хороший агроном.* のように男性として使用されるが、これも女性、あるいは通性の意義との対比から当然のことであろう。ニキチェヴィチは「職業、仕事の種類の領域においては、強い発展しつつある範疇は男性である。抽象名詞を示す場合には語の生産的なクラスは中性及び女性である」と述べている。この発言はそれ自身正しい。しかし何故かという理由は、大きな脈絡の中でのみ、捉えうるものであろう。本稿がこれらの点について、いくらかでも迫り得たとすれば望外の喜びである。

¹⁹cf. 拙稿「ロシア語における数のカテゴリーについて」。

²⁰Л. В. Шерба, *Опыты лингвистического толкования стихотворений, Русская речь*, 1, 1923, стр. 17.

²¹П. Бажов, В. М. Никитевич, *op. cit.*, стр. 34.